

真夏の ET 勉強会 in 鹿児島県

<夏場の受胎対策としての鹿児島県の取り組み>

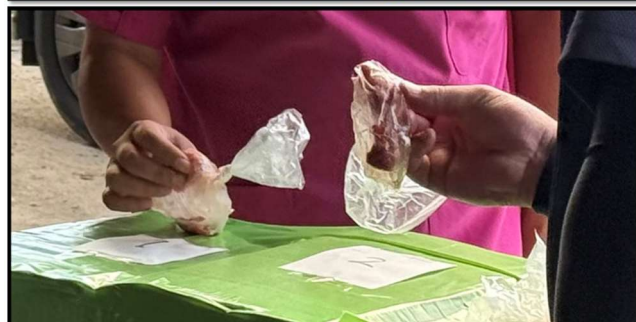
今年の夏は昨年に引き続いて日本列島は異常な暑さに見舞われ、全国的にも暑熱対策の選択肢の一つとして AI から ET への切り替えが増えています。この様な中、鹿児島県酪農業協同組合（以下、県酪）では移植技術料や当団新鮮卵輸送器の返送費用に補助金を出すなどのキャンペーンを行い、酪農家が受精卵を利用しやすくすることで夏場の受胎率を向上させる取組みを実施しています。今回その一環として、県酪移植師の技術向上のために勉強会が開催されることになりましたので、その様子を取材しました。

<暑い、熱い、勉強会>

鹿児島県酪には5つの地区があり、今回の勉強会は大隅支所管内の株式会社 YFK Holstein の牧場で行われました。ジ・エンブリオの安倍明德先生を技術指導に迎え、県酪各支所から職員9名が勉強会へ参加されました。箱の中に入れたと畜卵巣を目隠し状態で触って黄体や卵胞の状態を推察したり、実際に牧場の牛に対して直腸検査を行って移植適期の目合わせをしたりと、とても実践的な内容の勉強会でした。安倍先生に質問するだけでなく、職員同士で積極的に意見を出し合って切磋琢磨する様子からは、8月半ばの暑さに負けない熱量を感じました。巻末に勉強会で出た質疑応答の一部をご紹介しますので、是非ご参照ください。

<暑熱期の総合的な受胎対策>

会場となった YFK Holstein でも暑熱対策に力を入れており、取締役の柿元さんによると、今年は繁殖のほぼ9割を ET で行っているとのこと。OPU やゲノミック評価も活用し、計画的かつ高効率な経営をされていました。夏場の乳脂率低下の対策として、牛にかかるストレスを減らしてあげることが乳脂率の改善につながると考え、飼育環境の改善にも力を入れているとのことでした。（裏へ続く↓）



上：と畜卵巣の所見を答え合わせする様子。質問が飛び交う。中：答え合わせ後に目視しながらの再触診。納得するまで。下：直腸検査の様子。全員現役移植師のため目合わせも早い。



←バイテクホーム
ページはこちら！



一般社団法人 家畜改良事業団

また、牛舎の暑熱対策としては、ミストではなく屋根上スプリンクラーを採用することで、上がった気温を下げるのではなく、そもそも温度が上がらないような手立てをとっていました。湿度が上がらないため不快指数も上がりにくいとのことでした。



左：株式会社 YFK Holstein の取締役柿元さん。牛舎内は清潔に保たれ、管理が行き届いている印象。中央：牛舎の屋根から流れるスプリンクラーの水。かなりの量が流れ、この日は風もあったためか、8月半ばにしては涼しく感じた。右：勉強会参加の有志。安倍先生（下段右から2番目）と柿元さんを囲んで。

<おわりに>

移植は頭も体も使う作業ですので、感覚的なことを伝えるためには実地で技術を継承する必要があります。今回の勉強会では、日々の移植業務で出た疑問や不安を相談・議論し、職員の移植技術全体の底上げだけでなく、職員間のコミュニケーションも促進された、と参加した全ての方が感じていました。飼料・燃料費高騰が続く厳しい情勢の中、限られた予算の中で各県・各地で色々と知恵を出し合い取り組んでいました。今後も当センターでは、技術交流に積極的な活動をされている方々取材し全国へご紹介することで、日本の畜産を応援したいと考えています。当団 IVF 卵を利用したい、県・地域で取り組んでみたいとお考えの方は、是非とも最寄りの当団種雄牛センターへご相談ください。（家畜バイテクセンター 森）

Q & A

Q1. 移植を実施するかどうかを何で判断していますか？

A1. 新鮮胚なら黄体があれば移植します。
凍結胚なら黄体に加えて子宮の状態も考慮に入れます。

Q2. 黄体と卵胞が共存している場合は移植しますか？

A2. 黄体があれば卵胞があっても移植します。

Q3. 凍結胚の融解条件は夏季／冬季で変えますか？

A3. 季節によらず、
空气中10秒、温湯中10秒を守りましょう。

Q4. 移植で特に大事にしていることは何ですか？

A4. 衛生的に操作することと、迅速に作業することです。
3分以内に終わらせることを心がけています。
あらかじめ子宮角をひっくり返して「しつけ」をしておくなどの工夫を移植器のセット前にとすると良いと思います。